相模経済新聞　2018年9月10日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

北里環境科学センター
理事長／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

6

科学から空想へ、空想から科学へ

科学的知識の基礎を担う知の地平から、空想の世界へ飛び立ち、その未知の空間をファルコンのように自由に飛び回り、再び知の地平に舞い戻ってくる。そして現実の科学の置かれた状況をつぶさに検証してみる。すると、人類がこれから挑まなければならない文明の課題は膨大であることに気がつく。その課題を明確にして、未来の子供達に引き継ぐことが我々の役目であると考える。科学から空想へ、空想から科学への思考の展開は、科学に軸足を置いた未来文明への飛翔である。

具体的な例を挙げてみよう。近年、火星に100万人の都市を作るというニュースがある。果たしてそんなことが出来るだろうか。地球では、海と陸と天気がバランスよく保たれて、奇跡のような環境が保たれ、その中に全ての生命現象が組み込まれている。この環境構成員の二酸化炭素が僅か数パーセント変動しただけで、地球の気象は大混乱に陥っている。それでも地球は何事もないかのように生命現象を回している。

火星移住計画を検証してみよう。先ず、火星に生命がいるかどうか確認する必要がある。もし火星に生物がいたら、それが火星型なのか地球型なのかを確認する必要があり、その方法も確立しておかなければならない。生物がいる、いないに関わらず、生物学的に安全が確認されてから火星移住計画はスタートする。

火星に人が住める環境を作るところから事業は始まる。まず、循環する生命現象を火星の大地に根付かせること。ノアの箱舟作戦を太陽系にまで拡張することになる。人間は酸素を吸わないと5分間で死んでしまうという事実を忘れてはならない。国際宇宙ステーションでは、地球からのライフラインが完全に機能している状態で日常の生活が保たれている。火星に移住するためには、火星の資源でライフラインを作らなければならない。火星の環境を地球と同等のものにするのには、おそらく数億年の年月を要する。火星移住計画は科学と哲学の問題であって、経済の問題ではない。富裕層が巨万の富を積んでも移住計画は始まらない。

知の地平で冷静に考える限り、火星移住計画は、人類が地球環境の素晴らしさを再確認するための教育プログラム以外の何物でもない。アストロバイオロジーという学問は、人類にとって地球という惑星が奇跡の星であることを検証するための科学であると断言しても過言ではない。